紙芝居『みつこの詩』解説

文　：　奥羽　香織

元気で活発な女の子

1939 年　ミツコ 16 歳

このおはなしのモデル、大矢（おおや）ミツコさんは、1926 年、水俣市の隣の津奈木町で生まれました。津奈木尋常高等小学校を卒業した後、1941 年、15 歳の時、熊本市内に子守り奉公へ行き、病弱なお母さんに代わって小さなこどもたちのお世話をしました。

ミツコさんが 17 歳のある日、ミツコさんの叔父さんと叔母さんが訪ねてきました。上のお姉ちゃんにきた縁談をミツコさんが受けるようにとのこと。相手は 9 歳年上の大矢二芳（つぎよし）さんでした。

大矢二芳さんとの結婚

前列左より 2 人目
チッソの合奏隊でバイオリン演奏する二芳　1943 年

結婚前に二芳さんに会ったのは、たった一度。生前、私が「一度しか会ったことのない人と結婚することに不安はなかったのですか」と伺ったところ、「結婚とはそういうものだから。」と笑顔で話されました。

二芳さんが暮らしていたのは、水俣湾のほとり、明神（みょうじん）という場所でした。広い畑でネギや麦を作り、にわとりも飼っていました。二芳さんの家は、水俣湾に入ってきたいわしを獲る漁の親方でした。

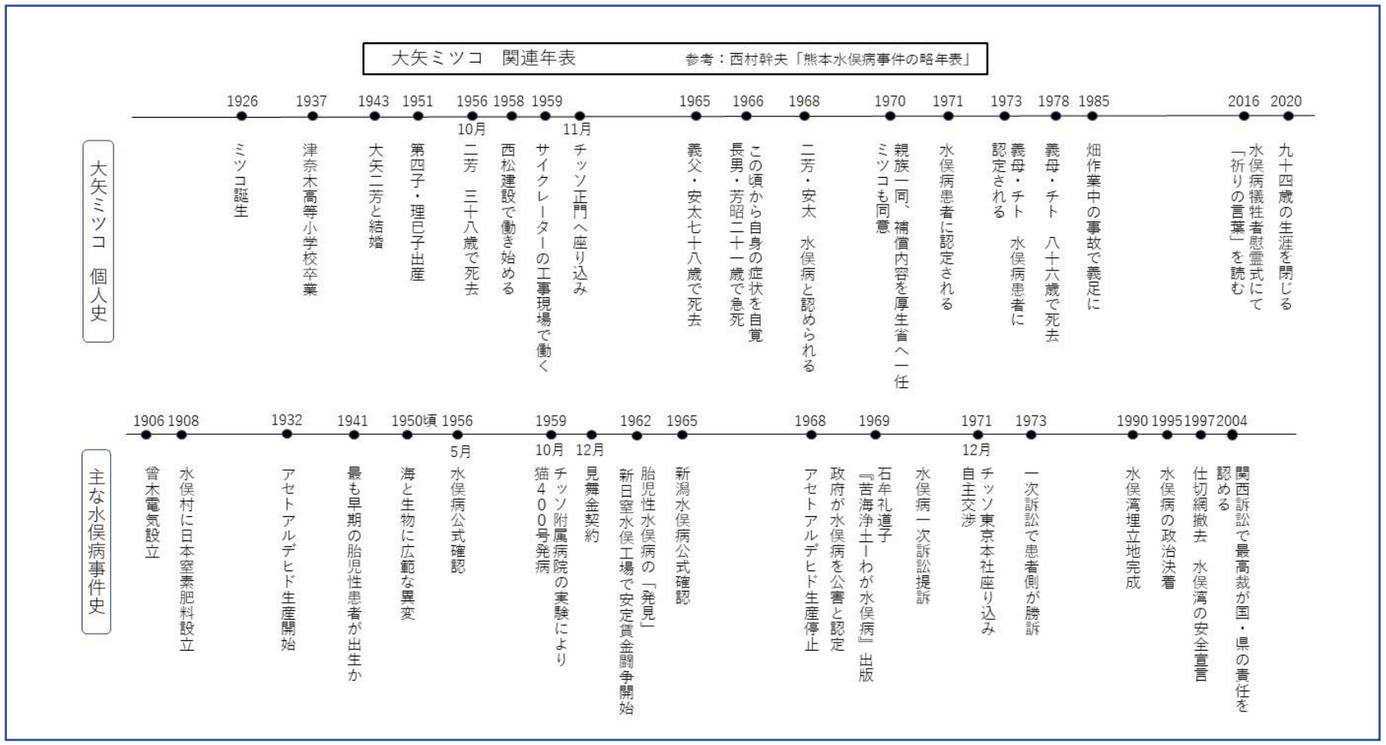
「主人は私にはもったいないくらいの人だった」とミツコさんは言います。二芳さんは、チッソ水俣工場で働いていました。本をよく読み、職人チームのリーダーや労働組合の執行委員、会社の演劇部で演劇をしたり、バイオリンも弾いたりしていたといいます。

1943 年　二芳・ミツコ結婚式

二芳さんの不調と死

1955 年 6 月、突然、二芳さんの具合が悪くなります。いつものように出勤しましたが、足がガクガクするようになりました。チッソの付属病院へ行きましたが原因は分からず、翌日、熊本大学病院へ行きましたが、そこでも原因は分かりませんでした。1956 年の「水俣病公式確認」の 1 年前のことです。

二芳さんは、1956 年 10 月 17 日、38 歳で亡くなります。なぜ具合が悪くなったのか分からないまま、死んでしまいました。当時、この病気は「奇病」と呼ばれていました。



二芳さんが亡くなってからの暮らし

前方右から 2 人目
水俣市山間地での稲刈りの後に
ミツコ 30 代半ば　1961 年頃

二芳さんが亡くなって 1 か月。今度は、じいちゃんが寝たきりになりました。じいちゃんは 9 年間、ミツコさんとお義母さんが介護しました。

一家の大黒柱を失い、じいちゃんも倒れ、ミツコさんは、建設会社へ働きに行きます。ミツコさんは、チッソ水俣工場の「サイクレーター」の工事にも行っていました。

「サイクレーター」とは、1959 年 12 月にチッソ水俣工場内に完成した排水浄化装置。有機水銀の除去を目的とした装置ではなかったにも関わらず、〝安全な排水〟が演出され、加害はごまかされました。

そして、その工事を、水俣病で夫を亡くし、家族のために働かなければならなかったミツコさんにさせたのです。

水俣病と認められるまで

1959 年、熊本大学がこの「原因不明の病気」は有機水銀が原因ではないかとの研究結果を発表した後、患者たちが補償を求めて、チッソ水俣工場の正門に座り込みをします。そこにミツコさんも加わりました。当時のチッソ社長、吉岡喜一さんに水俣駅でつかみかかったこともあったそうです。

この座り込みは、チッソによる「見舞金契約」をもって終わります。大矢家には「見舞金」として当時の 30 万円が渡されます。

これで、どうにかお金が入り、ミツコさんは西松建設を辞め、親戚の漁の手伝いにいくようになります。ミツコさん自身が体調不良を自覚したのは、1966 年、40 歳の頃だったといいます。

1968 年、政府は「水俣病」を公害とする見解を発表します。その後、厚生省により補償処理が行われますが、近所の親戚がチッソびいきだったこともあり、ミツコさんは、「水俣病患者家庭互助会」の「一任派」となってチッソと和解しました。その後、1971 年、45 歳の時、ミツコさんは水俣病患者に認定されます。

ミツコさんは、「結婚してから一度も魚を食べるなと言われたことはない。」と話されていました。水俣湾の汚染が一番ひどい時でも、近所の人たちは水俣湾の外、少し離れたところから獲ってきたら大丈夫だと食べていたそうです。

ミツコさんの晩年

ミツコさんは 59 歳の時、足に大けがをしますが、その後もなお、畑仕事は続けました。晩年は、ぬりえが大好きで、何色も何色も柔らかな色を重ね、花々の絵を描いていました。

2020 年 9 月 26 日、水俣病の真っただ中で生きてきたミツコさんは、一緒に暮らす末娘の理巳子さん夫婦と孫に看取られ、亡くなりました。94 歳でした。

参考『水俣フォーラム NEWS　第 38 号』、NPO 法人水俣フォーラム、2015

祈りの言葉

2016 年 5 月 1 日
水俣病犠牲者慰霊式にて、
大矢ミツコさんは「祈りの言葉」を捧げます。
ここに全文を掲載いたします。

（写真提供　水俣市）

ここに、患者・遺族代表として、祈り言葉を捧げます。

あれから、もう六十年もたったのですね。
津奈木町から十八歳で明神に嫁いで、私は初めて、漁師の暮らしぶりを知りました。
「かまど」で焼いたイワシのおいしさは、今も忘れません。
その時は、主人と主人の両親が水俣病でうばわれるとは、夢にもおもいませんでした。

二芳さん覚えていますか。あなたは昭和二十九年頃、チッソの勤めで忙しい時だったですね。
職場の人たちと音楽や、演劇を楽しんだり、組合のことにも、熱を入れていました。

そんなあなたが、急に「口の回りが、もやもやすっと、手足がふるえて、力が入らん。」と言い出して、
私はびっくりしました。

すぐにチッソの附属病院に行きましたよね。
「何の病気かわからん」と言われて、雨が降るなか、熊本の大学病院まで、言ったのを覚えていますか？
結局は大学病院でもわからずじまいでしたね。

チッソの附属病院に入院した時の担当は三隅先生でした。
はっきりとした病名はなく、ペニシリンやビタミンの注射をしてもらいました。

私は栄養をつけるのが一番だと思って、病院で、魚をこしらえて食べさせていました。
今、思うと、わざわざ毒を食べさせていたのと同じだったのです。

それでも、入院している間は、しょっちゅう魚を食べなかったからでしょうか？
退院できることになり喜んでいましたね。忘れもしません。
昭和三十一年五月二十八日に退院して川内の西方温泉に湯治に行きました。
ずっとそこにいれば、命は助かっていたかもしれないのに、ひと月位で明神に帰ってきました。

もともと大好きな魚が、目の前で獲れるから、元気になるように、またいっぱい食べたですね。

くやしいのは、「魚は絶対食べたらいかん」と教えてもらえなかったことです。
あのような、恐ろしいケイレンがきて、ばたばた暴れるし、
立つことも、歩くこともできんようになって、最後には言葉も何も出らんようになったですね。
あの時、長男の芳昭の赤白帽子を胸にしっかり抱きしめて泣いていましたね。

それからあなたの命は、わずか二十日でした。
まだ三十八歳になったばかりで、病気の名前も原因も知らないでさぞかし、無念だったでしょう。

まだまだ仕事もして、やりたいこともたくさんあったのでしょう。
葬式には、職場の人たちも、たくさん来てくれて、別れを惜しんでくれました。

私の人生はあれから、がらっと変わりました。
あなたが亡くなって、ひと月が経ったころでした。
じいちゃんまで、同じ病気になって、看病の毎日がやってきました。
私は三十歳になったばかりで、慣れないことだらけでした。

その頃は補償金もないし、仕事の経験もなかった私が、家族六人を養っていくしかなかったです。
漁をしたり、西松建設で、男の人にまじって力仕事でした。

昭和三十四年頃に、大きな浄化槽を造りにチッソにも行きましたよ。
後でそれが、「サイクレーター」だったと聞いて驚きました。
水俣病患者家庭互助会の人たちと、チッソの前に座り込んだ時は、複雑な気持ちでしたよ。
チッソはあの時に、ちゃんと謝ってくれればよかったのにと思います。
あなたは、人の先頭に立って闘う人だったから、
後で裁判が始まった時も、本当は皆と一緒に頑張りたかったのでしょう。

何よりも辛かったのは、癌で死んだ、長男の芳昭のことです。
「これから、父ちゃんの分まで働いて、かあちゃんば楽にせんばいかんとに。くやしか！
　死なんばならんとやろか。」って、癌と闘いながら苦しい中、家族の心配をしとったんです。

その時だけは、私はくやしかった。
とうちゃんが水俣病で死んだりせんやったら・・という思いと、チッソが憎らしかった。
大学生なったばかりの、芳昭の背中をさすりながら涙がとまりませんでした。

私も九十歳を迎えました。
水俣病があって苦労もいっぱいありました。
私のような、悲しみは、もう誰にも、してほしくありません。
同じ水俣の中で、いがみ合ったり、するような苦しみはもう嫌です。

チッソは、主人に本当に「すまなかった」と思うなら、
逃げたりしないで、水俣病のことを、ちゃんと伝えて欲しいです。
主人たちの命を無駄にしないような会社になって欲しいです。

あれから六十年。そちらで、あなたに会える日もそう遠くないと思います。
そのときは、ゆっくり話しましょう。

どうぞ、これからの世の中が、安心して暮らせますようにお守りください。
犠牲になられた皆様、安らかにお眠りください。

平成２８年１０月２９日　　患者・遺族代表　　大矢　ミツコ